

2021/04/17 公開



ごうちゃんねる (GO-CHANNEL)

■ ユダヤ入門シリーズ ■

#19 「中世ヨーロッパに吹き荒れた宗教的ユダヤ人迫害」

東住吉キリスト集会 高原 剛一郎 氏



お元気ですか。高原剛一郎です。今日はユダヤ入門シリーズ第19弾！パチパチパチ！
まあね、皆さん。今日の話はね、あんまりパチパチみたいな陽気な内容じゃないんです。
だけど、ユダヤ人のことを理解しようと思ったら、やっぱり今までの経緯を知っておくことが必要なんです。そのためには、ユダヤ人がくぐって来た迫害の歴史にも、どうしても向き合わなければなりません。そこで、あんまり気が進まないのですが、一緒に考えたいと思います。

十字軍以前にもユダヤ人への迫害はありました。でもそれはある意味、よそ者に対する先住者たちの警戒感みたいなものに由来していて、とりとめのないものと言えそうです。ところが十字軍の後には、何かと宗教的理由をこじつけられて迫害されるようになります。その迫害の内容は、大きく分けて3つくらいあると思います。

1) 「ユダヤ人は自分たちの宗教的行事のために、クリスチャンの少年の血を食べている」という根も葉もない噂が広がって行くんですね。全ヨーロッパに。

詳しく言うと、ユダヤ人は“過越し(すぎこし)”というお祭りを年に1回お祝いします。その時“種なしパン”(マッツァと呼ばれるクラッカーのような乾燥しているパン)に、キリスト教徒の男の子の血を塗って食べるという噂が広がったんです。それで、子供たちが行方不明になると、「あ、ユダヤ人がやったんだ」となるわけです。全く荒唐無稽な話で、これあり得ない。絶対にあり得ないです。

過越しの祭りを祝うことは非常に宗教的な敬虔なユダヤ人…、過越しは世俗的なユダヤ人でもお祝いしますが、宗教行事と言えば宗教行事です。ユダヤ人の律法(旧約聖書)の中に、「血を食べてはならない」とハッキリ書いてあるんですね。神のことばに従おうと思っているユダヤ人が、宗教行事を守るために神のことばに背くようなことをわざわざするはずがないんです。荒唐無稽な噂で全くナンセンス。

それがウワースと広まって、信じられてしまうのはなぜか？
当時ヨーロッパの一般の人たちは旧約聖書を誰も読んでない。いや、読めなかったんですね。というのは、旧約聖書が自分たちが話している言葉に翻訳されるのは16世紀になってからなんです。それまではラテン語の、またヘブライ語の旧約聖書で、一般の人たちにはチンプンカンプン、何書いてあるかよく分からない。中世時代のヨーロッパの人たちは、旧約聖書を読んだことが1回もありません。

それに代わるものとして、旧約聖書を物語風にした簡単な読み物が人口に膾炙(じんこうにかいしゃ)し、口伝で伝えられました。自分で読んだのではない 曖昧な耳学問・聞いた話で、ユダヤ人はエジプトで奴隷だったとか、神が立てたモーセによって紅海が割れたところを渡って行った、などの話は知っている。知ってはいるけれど、旧約聖書を読んだことは1回もない。

だから、ユダヤ人は血を塗って食べていると言われたら、そんなもんなのかと信じてしまうんですね。特に13世紀、この噂は全ヨーロッパに広がり全盛期を迎えます。

ある時、イングランドでクリスチャンの少年が行方不明になりました。間もなく、「ユダヤ人が例の祭りのために、その少年を誘拐してはりつけにし、血を搾り取って、その血を種なしパンに塗って食べている！」という噂が広がったんですね。それで町は大パニック。このままでは治安維持が保てず、暴徒化した国民が何をするか分からない。治安維持のため、イングランド王はユダヤ人共同体から 20 名のユダヤ人を選抜し、問答無用で有罪判決にしました。20 人は拷問を受け、既に準備されていた自白書にサインさせられて処刑されたんです。

ところが後になって、行方不明になっていた少年の遺体が出て来たんです。その遺体を見ると、血は 1 滴も抜き取られていませんでした。十字架にはりつけられた傷跡は、両手両足どこにもありませんでした。ということは、これは冤罪！この噂は根も葉もないことで冤罪だ！となるじゃないですか。ならなかったんです。

どのように説明したと思いますか？「奇跡によって、血と傷跡が一瞬にして元通りになった。はい、これで一件落着！」めちゃくちゃでしょ。これがイングランドだけじゃなく、大変な勢いで大陸にも広がって、その噂が出るたびユダヤ人は迫害されたんです。

2) 「聖餐式（せいさんしき）のパンを盗む」という噂。

これは 14 世紀のドイツでクライマックスを迎えます。

リンドブライシュという狂信的な男が当局に密告しました。「私は 1 人のユダヤ人が聖餐式のパンを盗んで、それを石臼の中に入れて粉々に粉砕するところを見ました！」

そして、リンドブライシュを先頭に 怒り狂った暴徒たちがユダヤ人街になだれ込んで、思うままにユダヤ人殺しをやったんです。

聖餐式とはイエス・キリストが弟子たちに命じたことで、クリスチャンが非常に大事にしている儀式です。キリストの体を表すパンとキリストの血を表すぶどう酒。この 2 つの品を通して、キリストの犠牲をかみしめる。この 2 つを食べること、飲むことによって、キリストの自己犠牲を思い返すという儀式。

でも、パンそのものはパン。パン以上でもパン以下でもない。

パンを盗んで粉々にした。だからといって、殺されなければならないというね。

なんでそこまで逆上したのか？ 当時カトリックでは、神父さんが信者の口の中にそのパンをパッと入れると、舌に乗った瞬間にキリストの肉片に変わると教えてたんです。

つまり、そのパンを粉々にするというのはキリストの体を粉々にするのと同じで、キリストに対する凌辱・辱めだということで逆上したんですね。盗んでなんかない。だけど、そういうことをやったんです。

これを放置していたらドイツ中で收拾つかない。連鎖反応のようにユダヤ人が次々狩り出されてしまう。そこでドイツの権力者は、リンドブライシュを捕まえて絞首刑、殺してしまいました。

そうして騒ぎを収めたという話があります。

3) ユダヤ人迫害の有名なものは「タルムードを焼き捨てる行事」。

最初のタルムード焼き討ち事件は 1240 年にパリとローマで起こりました。

14 世紀のフランスでは 4 回、16 世紀のイタリア諸国では 12 回もタルムードが焼き捨てられたんです。タルムードがユダヤ教の根本経典だと見られているからですね。

ところで、ユダヤ人の宗教的迫害には、2 つほどの不思議な・不可解な特徴があるんです。

■最初の言い出しっぺはユダヤ人なんですね。

「過越しのパンにクリスチャンの少年の血を塗ってる」と最初に当局に言いつけたのは、ユダヤ人でカトリックに改宗した人。パン粉碎の話も改宗したユダヤ人。「タルムードはいけない本だ」と当局に入れ知恵したのも改宗したユダヤ人。

ユダヤ人が同胞ユダヤ人を苦しめるようなことをした。ユダヤ人を最も苦しめる引き金となったのはユダヤ人。ユダヤ人が当局に吹き込むことによって、迫害に拍車を掛けて行った。これは不思議なことです。なんで同胞を追い詰めるようなね、なんでそんなことをするのかね。不思議なことだと思うんです。

実は日本でも同じようなことがありましたね。今でも起こってますよ。

例えば今 日韓の問題でトゲのように刺さっている事の1つは従軍慰安婦の問題ですよ。この問題を初めにでっち上げて、騒ぎ立てて、韓国にまで渡って吹聴して行ったのは日本人ですよ。

有名なのは吉田清治（よしだ せいじ/1913-2000）。

彼は「戦時中 済州島に渡って、軍の命令で、若い朝鮮人女性をアフリカの奴隷狩りのように拉致し、強制連行した」と言って、それを自分の本に書く。講演する。韓国に行く。アメリカにも行く。日本全国各地回って、「私の手は汚れています。私自身が従軍慰安婦として強制連行したんです。軍の命令で仕方なかったんです。」言いまくって。これを朝日新聞・北海道新聞が事実として報道した。

ところが、このことについて、済州島の済州新聞という新聞社が追跡調査をしたんです。当時の人たちがまだたくさんいたので、片っ端から聞き取り調査したところ、島の住民はだれもが「そんなこと、見たことも聞いたこともない。そんな事実は一切知らない」と異口同音に言うのです。それで、日本からも韓国からも研究者が行き、地道な調査をした結果、同じ結論になったんですね。つまり、それはでっち上げた話。最後は吉田清治自身も「作り話だった」と認めました。

しかし、韓国政府が作った従軍慰安婦レポートの中に、これが証拠として今でも載ってます。国連人権委員会のクマラスワミ報告書にも、“吉田清治証言は事実だ”と今でも採用されているんですね。

どうして嘘をついてまで、同胞が困ることをするのでしょうか？
これで日韓関係が悪くなって、何が嬉しいんでしょう？何が楽しいんでしょうね？
この辺の心理学的な構造を、誰か解明してほしいなと思います。

■中世ヨーロッパでユダヤ人が宗教的迫害を受けている時、実はカトリック教会・キリスト教会によって、ユダヤ人以上に宗教的迫害を受けていた人たちがいました。クリスチャンたちです。

当時の教皇の考えや教会の考えに異論を述べた少数の、或いは無名のクリスチャンたち、教会の意に反して新約聖書を勝手に母国語に翻訳していった人たち、翻訳した抜粋を印刷して配った人たち、みんな火あぶりです。迫害の口実は、後からいくらでも付けることができました。魔術や魔法を使ったとかね。魔女裁判ですよ。要するに、言いがかりをつけて迫害をしていった。

つまり歴史上、本物のクリスチャンを最もたくさん殺したのは教会です。教会がキリストの名前を使って、キリストを本当に純粋に信じているクリスチャンたちを大迫害して血を流して来たんですね。

また、ユダヤ教典タルムードが燃やされている以上に徹底的に目の敵にされたのは、ラテン語以外の言語に翻訳された新約聖書でした。

教会は、一般の人たちが自分たちの言葉で聖書を読むことを恐れていたのです。

聖書を読ませないようにするために、翻訳事業に関わる人を処刑するという暴挙に出たんですね。

この歴史があったことを、ぜひ心に留めておきたいなと思います。

というのは、そんな時代が再びやってくる**黙示録**に書いてあるからです。

患難時代前半、患難時代に信じて救われたクリスチャンを迫害するのは反キリストではありません。

世界統一宗教が地上のクリスチャンを迫害する。本物の信仰者を迫害するのは二セモノの自称クリスチャンたち。これは歴史上 既にあったことだということなんですね。

ですから、そういうことがあったというのを、少し頭に入れておきたいと思います。

さて、ユダヤ人の話に戻りましょう。西ヨーロッパのあちらこちらで、色んな理由を付けられて、周期的にユダヤ人が迫害されるようになり、ここにおっても、ヨーロッパ中どこに行っても安全な所がない。イギリス・フランス・イタリア・ドイツ、どこに行っても、いつ迫害があるか分からない。

ユダヤ人は迫害を逃れるためにどうしたのか？ 東ヨーロッパに移住し始めました。特にポーランド。

ポーランドのボレスワフ 5 世 (1226-1279) が 1264 年、ユダヤ人の自由と自治権を認めたんです。

そして、西ヨーロッパでは絶対に認めなかった様々な特権を与えていったんですね。

例えば土地の所有権。ユダヤ人は土地を所有しても良い。財産を持っても良い。

ポーランドでユダヤ人は貴族のような生活をしました。非常に優遇されたんです。

なぜなら、西側の色んな技術、特に商業・金融業について、ユダヤ人は大した知識を持っていたんですね。

彼らは渡来人みたいなもんで、西側の最先端の文化を持って来てくれるわけです。

王様の都市計画に協力してくれる。商業や工業を起こすのに様々な技術を教えてくれる。

そうすることで、遅れていた東ヨーロッパの国々が先進西ヨーロッパと競い合えるところまで、貴重なノウハウ技術をもたらしてくれたんですね。だから、もっと来て。もっと来て。

ポーランドがユダヤ人を非常に優遇したその時代、ポーランドはヨーロッパ最大の国に発展しました。

東の国境はモスクワの近くまで行くんですよ。なぜそのようになったのでしょうか？

アブラハム契約です。『ユダヤ民族を祝福する者は祝福され、ユダヤ民族を呪う者は呪われる。』

その通り。

ユダヤ人を追い出した西ヨーロッパの国々は、またガタガタに落ちて行く。

それで「また戻って来てえな」、言うて頼むんですよええ。

聖書の言葉は非常に分かりやすい歴史の事実として、そこに反映されていると思います。

次回はもう 1 つ、ユダヤ人が西ヨーロッパにいながら生き延びるために取った方法について、ご紹介したいと思います。

また、このチャンネルを訪問して下さったら嬉しいです。それまで皆さん、お元気でいらしてください。

それでは皆さん、ごきげんよう。さよなら！